

プレゼンテーション V 「年間と主の祝祭日」

宮越俊光 (日本カトリック典礼委員会秘書)

これまでのプレゼンテーションでは、待降節・降誕節・四旬節・過越の聖なる 3 日間・復活節という主要な季節について説明されてきました。ここでは、これらの季節を除いた期間である「年間」について取り上げることにします。

「年間」とは

まず「年間」という名称ですが、私自身これまで、なぜ「年間」という名称がつけられたのかについては、あまり具体的な説明を受けたことがありませんでした。ラテン語では“Tempus «per annum»”ですが、「年間」とはなかなかうまく訳されているという気がします。教会の特別な専門用語ではなく、一般的な日本語である「年間」を使ってこの季節が表されている点もよく考えられているように思います。

「年間」については、「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」の 43 番と 44 番に概要が記されています。短い文章ですが、「年間」がめざすものがよく表されています。

43 番は次のように述べています。「固有な特質を備えた諸節を除く場合、キリストの神秘の種々の面を取り立てて祝わない週間が、一年の周期の中で、33 ないし、34 週残ることとなる。こういう週間、また、とりわけ主日は、むしろキリストの神秘全体を追憶するものである。この期間は『年間』という名で呼ぶ」。ここに見られる、「固有な特質を備えた諸節を除く」や「キリストの神秘の種々の面を取り立てて祝わない」という表現から、「年間」は他の季節より少し格下げされているという印象を受けるかもしれません。すでにプレゼンテーションされた待降節・降誕節の顕現周期や、四旬節・過越の聖なる 3 日間・復活節の過越周期など、キリストの生涯の主要な出来事を祝う季節に比べて、年間はたしかに主の生涯の特定の出来事を記念するわけではありません。しかし、「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」によれば、「年間」の役割は「キリストの神秘全体を追憶する」とあります。これが「年間」のめざす大きな特徴だと

思います。

そして、続く 44 番は「年間」の期間について定めています。すなわち、主の洗礼の祝日の翌日の月曜日 (年によっては火曜日) から、四旬節直前の火曜日まで続きます。そして、四旬節と復活節を祝った後、聖霊降臨の主日の翌日から再び始まり待降節第 1 主日の前晩の祈りの前まで続きます。年によって異なりますが、この期間には、33 週または 34 週が含まれます。

名称の変化

第 2 バチカン公会議後の典礼暦の改定によって大きく変わったのはその名称です。第 2 バチカン公会議以前には「年間」という呼び方はありませんでした。四旬節が始まる前の比較的短いほうの期間は「公現後第〇主日」のように、主の公現の祭日を基準に数えられていました。そして、復活節後の長いほうの期間は、聖霊降臨の主日を基準にして「聖霊降臨後第〇主日」と数えられていました。これは、典礼史の本によると 8 世紀ごろから秘跡書 (sacramentarium) が編纂されていく中で、当時慣用されていた名称の流れをくんでおり、トリエント公会議後の *Missale Romanum* でもその名称が採用され、「公現後第〇主日」、「聖霊降臨後第〇主日」という呼び方で第 2 バチカン公会議に至るまで使用されていました。

第 2 バチカン公会議の刷新はこの名称について変更し、異なる名称で呼ばれていた上記の 2 つの期間を、統一性・継続性をもつ一つの季節と考えて、“Tempus «per annum»”という表現が選ばれました。その“per annum”が日本語で「年間」と訳されましたが、“per annum”は、ほかにどのように訳せばよいのでしょうか。英語では“The Season of Ordinary Time”と呼ばれています。“ordinary”が用いられているので、「通常の」という意味になるのでしょうか。英語の辞書には、“ordinary”とは「取り立てて特徴のない」とありますから、「典礼暦年と典礼暦に関する一般原則」でいう「取り立てて祝わない」にあてはまり

ます。しかし、この「取り立てて祝わない」をネガティブな意味で捉えるべきではないと思います。むしろ「年間」(per annum) という名称で待降節・降誕節・四旬節・復活節以外の期間を統一したことにより、「キリストの神秘全体を追憶する」季節としての統一性・継続性がもたらされたといえるでしょう。

「年間」の典礼の特徴

すでにお話ししたように、「年間」はあたかも「特徴がない」という印象を与えるかのような定義が採用されていますが、その第1の特徴は、一年の中で最も長い「典礼季節」であるということです。33週または34週からなる季節ですから、8か月ほどに及ぶ期間です。現行『ローマ・ミサ典礼書』の規範版(2002年)を見ると、「年間」も“Tempus”(季節)の中に入れてあります。その意味では、現行の日本語『ミサ典礼書』は書き間違えているのかもしれませんが。日本語版の目次には「季節」と「年間」が併記されていますが、ラテン語規範版は“Tempus”という大きな枠の中に、待降節、降誕節、四旬節、復活節とともに「年間」も置かれています。つまり、“Tempus Adventus”(待降節)のように“Tempus «per annum»”は季節という点で同じ扱いがされているのです。かつて受けた典礼の説明では、「季節」と「年間」とはそれぞれ別の枠の中にあるものとして扱われ、また私自信もそのように対比させて説明してしまうことも多いのですが、実は「年間」もまた「季節」(Tempus)の中に位置づけられているのです。このようなことをふまえると、「年間」を新たな視点で見直すことができるように思います。

また、毎年秋に発行される次年度の『教会暦と聖書朗読』(通称「オールド」)には、「典礼暦について」という解説が掲載されています。この中には『「季節」と「年間」』という項目があり、「典礼暦は、固有の特徴を持つ『季節』と、それ以外の期間である『年間』とに分けられています」と説明されています。これは、これまで説明されてきたとおりの表現だと思いますが、『ローマ・ミサ典礼書』の規範版に基づくなら、「季節」と「年間」の対比を強調するよりも、最も長い季節である「年間」を通して「キリストの神秘全体を追憶する」という視点を強調していくことも大切だと思います。

「年間」を特徴づけているもう一つの要素は、3年周期の主日の聖書朗読配分です。ご存じのように、主日の福音朗読をA年、B年、C年と割り振り、マタイ福音書、マルコ福音書、ルカ福音書を継続して読むようになっています。『朗読聖書の緒言』86ページには「聖書朗読法一覧」の表があります。主日のミサの3年周期と週日のミサの2年周期の朗読配分が、どのような基準で選ばれているかを表したものです。3年周期の主日の聖書朗読配分の「年間」では、福音朗読の選択の原則が「キリストの秘義(公生活の出来事)を福音書の記載順に」読むという特徴が記されています。これは「準継続秘義朗読」と呼ばれています。つまり、聖書の記載順に各福音書を読むスタイルです。ただし、ヨハネ福音書だけは、とくに最も短いマルコ福音書を読むB年を補完するように配分されています。『朗読聖書の緒言』105番にある年間主日の朗読の解説では次のように述べられています。「このような配分によって、各福音書の思想と典礼暦年の展開との間に、ある種の調和が得られるようになっている」。

ミサの福音朗読をよく理解するために皆さんが重視されるのは、第1朗読との関係だろうと思います。先ほどの「聖書朗読法一覧」には、第1朗読は「福音の秘義の予型として」、「主題の調和」によって選ばれているとあります。ですから、第1朗読は継続朗読ではなく、その日の福音朗読に応じて旧約聖書からさまざまな箇所が選ばれているのです。その理由は、「新約と旧約の一貫性を表すため」(『朗読聖書の緒言』106番)と説明されています。

このような一貫性を理解するために役立つのが、各朗読につけられた「主題句」です。「主題句」は、『聖書と典礼』や『毎日のミサ』などで聖書本文の前に小さな字で示され、その朗読の中心主題を示しています(『朗読聖書の緒言』123番)。もちろんその朗読箇所のテーマは、提示されている「主題句」だけに限られませんが、旧約朗読と福音朗読との関連性を探るうえでたいへん参考になり、その日のことばの典礼のテーマにもつながってくるのです。

次に、第2朗読の扱いについて見てみたいと思います。第2朗読として読まれる使徒の書簡は、福音朗読と関連づけにくいという指摘があります。

私たちは第2朗読を通して、初期のキリスト者の生き方やあかしを受け止めることができるので大切な朗読です。けれども、第2朗読ではパウロの手紙、ヤコブの手紙、ヘブライ人への手紙を準継続で朗読するため、福音朗読の主題と合わないこともあります。たまたまその日の福音朗読とテーマが合うこともあります。関連を見いだすことが難しい場合のほうが多いので、第2朗読の扱いの難しさが指摘されているのでしょう。

『朗読聖書の緒言』79番では、司教協議会の決定があれば第1朗読または第2朗読のうちのいずれかを選択する可能性も示されています。日本では、現時点ではこのような選択を導入する予定はありませんが、この規則に従って福音朗読前の朗読を1つだけに行っている国もあります。もちろん、単に説教で扱いにくいからとか、内容が難しくて分かりにくいから、などということだけを理由にしてどちらか一方を朗読しないのはふさわしくありませんが、第1朗読または第2朗読のいずれかを選択して朗読するという可能性も、この緒言には規定されています。

なお、週日のミサの聖書朗読は、第1朗読は2年周期、福音朗読は1年周期の準継続朗読の方法です。福音朗読は、マタイ、マルコ、ルカの各福音書から、キリストの救いの出来事を聖書に記載されている順に朗読していきます。

このように「年間」は、主日の福音朗読を中心にして、キリストによる救いの秘義を継続して追憶するのです。キリストの誕生、そして受難と死と復活は、待降節、降誕節、四旬節、復活節を通して際立って祝われますが、キリストのその他のさまざまな救いのわざを週ごとに味わう大切さを確認することによって、典礼暦年における「年間」の位置づけも見直すことができるのではないかと思います。一年のうち最も長い季節の中でキリストの神秘を追憶する、今それを再確認する必要があると思います。

また、「年間」以外のそれぞれの季節に固有の公式祈願があるように、「年間」も主日ごとに固有の公式祈願をもっています。したがって、それぞれの主日に記念される救いの出来事とその日の公式祈願との関連性にも目を向けるとよいと思います。日本では規範版に掲載されている公式祈願以外に、主日のミサの公式祈願の「試用版」も併用されています。この「試用版」は、3年周期の聖書朗読

のテーマを念頭において独自に試作されたもので、その日に記念するキリストの救いの出来事という観点から、説教や共同祈願の意向などを含めてミサ全体を準備する際に役立てることができると思います。将来、この「試用版」の公式祈願は、さらに修正が加えられてよりふさわしい内容になることが期待されています。

「年間」に祝う主の祝祭日

33週または34週に及ぶ「年間」には、主の祝祭日がいくつか組み込まれています。南雲委員のプレゼンテーションでは、「年間」において7つの主の祝祭日が祝われることが指摘されました。ここでは、祭日と祝日を分けて考えてみましょう。

まず祭日ですが、聖霊降臨の主日の翌日から「年間」が再開し、日本では2週続けて「年間」の主日に主の祭日が祝われます。すなわち、「三位一体」と「キリストの聖体」で、どちらも「年間」の主日に優先されて祝われます。そしてさらに、「キリストの聖体」の祭日が祝われた週の金曜日には「イエスのみ心」の祭日を祝います。また、「年間」の最後の主日には「王であるキリスト」の祭日が祝われます。これらの祭日は歴史的に見るとあまり古いものではなく、教義と信心業の発展との関連で生まれ、典礼暦の中に導入されるようになった祭日です。「三位一体の主日」は、14世紀ごろまでは暦には入れられていませんでした。これは、南雲委員も指摘していたように、ミサにおいては父と子と聖霊の三一の神を礼拝しているという考えが根底にあるからです。「キリストの聖体」も、どのミサにおいても最後の晩餐における聖体の制定を記念しているので、聖体についての信心が広まった13世紀までは典礼暦には導入されていませんでした。「イエスのみ心」も同様で、17世紀以降にみ心への崇敬が広まったことを受けて、19世紀に取り入れられました。さらに、「王であるキリスト」は20世紀初頭、第1次世界大戦や独裁者の台頭といった不安定な社会情勢の中で、キリストこそがまことの王であることを強調することを意図して導入されました。

このように「年間」の中で祝う祭日はいずれも、第2の千年紀になってから典礼暦の中に導入されたものです。こうした祭日は、“Feasts of ideas”、教義祝日、理念祝日、あるいは主題祝日などと呼ばれています。すなわち、教義や信心といった教

会の伝統を背景にして暦に導入されたものなので、そして、これらの祭日は日付で固定されているのではなく、いずれも移動祝日であるということも特徴して挙げておきたいと思えます。

このような祭日に対して、主の祝日は移動祝日ではなく日付で決まっておき、古代の東方教会を起源としています。「主の奉献」(2月2日)、「主の変容」(8月6日)、「十字架称賛」(9月14日)は、いずれも4~5世紀の東方教会に由来する祝日で、中世期に西方教会に導入されました。これらは「年間」の主日に重なることもあり、その場合は主日に優先して祝われます。

「年間」を理解するための留意点

以上「年間」について確認してきましたが、最後に留意点として3つお話ししたいと思います。第1の点は、「主日」は『典礼憲章』106条で述べられているように「根源の祝日」であり、この主日の本来のあり方を考える期間として「年間」を位置づけられるのではないかとということです。待降節も降誕節も、また四旬節も復活節も、教会の歴史の最初からあったわけではないということは、これまでのプレゼンテーションを通してお分かりになったと思います。それらは教会の実践を通して3~5世紀ごろに生まれ、発展してきたものです。キリスト教の初期の時代にはこのような「〇〇節 (tempus)」といったものではなく、安息日の翌日である週の初め日の集會がありました。つまり、「主日」の祝いです。キリスト者が週の初めに一つに集まり、そこでキリストの過越を記念するということです。教皇ヨハネ・パウロ2世の使徒的書簡『主の日ー日曜日の重要性』でもそのことが指摘されています。日曜日は週ごとに祝う復活祭であり、このことは古代から言われてきたことです。使徒的書簡『主の日』19番には古代の文献の引用があり、『わたしたちは日曜日を祝います。主イエス・キリストの尊い復活の日だからです。わたしたちは復活祭のときだけでなく、週が繰り返されるたびに祝います』。5世紀の初め、教皇インノケンチオ1世はこのように手紙を書いて、主が復活した後の初期の時代から広まっていた習慣が、すでに十分に定着していたことをあかししています。聖バジリオは、『聖なる日曜日は、主の復活のゆえに尊ばれ、他のあらゆる日々の初穂です』と語り、聖アウグスティヌスは日曜日を『過

越の秘跡』と呼んでいます」と説明されています。日曜日は根源の祝日、週ごとに祝うイースター、小復活祭という位置づけが本来で、その後、徐々に顕現の秘義や過越の秘義を中心的に祝う期間 (tempus) が設けられ、そのほかの週間が「年間」と呼ばれている期間になりました。ですから原点に立ち返り、取り立てて特徴がないことをあえて特徴と考へて、「年間」の主日を見直していくこともできると思えます

第2の点は、顕現周期と過越周期、ならびに「年間」の中で祝われる祝祭日との関連づけです。顕現周期と過越周期を記念する2つの期間の間に位置する「年間」は、逆の見方をすれば「年間」の間に顕現周期や過越周期を包括しているともいえます。また、「年間」の中にも主の祝祭日だけでなくマリアや聖人に関する祝祭日があります。こうした要素を独立した祝祭日として祝うだけでなく、「年間」の流れを軸として、「年間」と関連づけて祝っていく工夫をすることも大切ではないでしょうか。

最後に、『朗読聖書の緒言』105番にあるように、主の宣教の始めから終末主日に至る「年間」全体の一貫した流れを捉えることについてです。「年間」の始めは、公現後の主の宣教の始めから朗読が始まります。そして、典礼暦年のいわゆる終末主日といわれる年間第32~34週では、朗読箇所が固有の終末の主題に結びつくようになっています。主の宣教の始めから一年を通して終末に至る救いの歴史全体を概観する、想起する期間として位置づけられています。

市瀬委員によるプレゼンテーションとも関連がありますが、K・H・ビーリッツ著『教会暦ー祝祭日の歴史と現在ー』の初めに、歴史観、時間についての考え方が説明されています。そこでは、循環する時間の流れと直線的な時間の流れという、2種類の時間の捉え方が指摘されています。循環的な時間は、進んでいくとある地点で終わりになりますが、その終わりがまた次の時間の始まりになるという円環的な動きとして説明されています。一方、出発点から何らかの目的に向かって直線的に流れる時間観もあります。キリスト教は、神による世界の創造があり、私たちにはいつ実現するか分かりませんが終末の完成のときまで直線的に進む「救いの歴史」、「救済史」として時間を理解しています。キリスト者にとって「すでに」救い

主キリストは誕生していますが、同時にキリスト者は、「いまだ」キリストの再臨を望む時間の中に存在しています。市瀬委員はまた、螺旋的に進む時間の概念についても説明されました。典礼暦は、「年間」最後の主日の「王であるキリスト」の祭日で終結しますが、それに続く待降節の最初の 2 週は、その終末主日のテーマである主の再臨を引き継いでいます。したがって、典礼暦年は一年を

周期とする円環運動でありつつ、完成の時に向かって直線的に流れていく螺旋的な構造になっていることができます。

初めに述べたように、「年間」はあまり特徴のないという点が強調されてしまうことがありますが、「年間」を一つの“Tempus”（季節）として見直すことによって、新たな側面が見えてくるのではないかと思います。

¹⁾ K・H・ビーリッツ『教会暦－祝祭日の歴史と現在－』松山與志雄訳（教文館、2003年）39-44頁参照。